The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	English Psychological Constructions : Semantic Interplay of Verbs, Nouns and Constructions
Author(s)	中尾, 朋子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　中　尾　朋　子　　）	
論文題名	English Psychological Constructions: Semantic Interplay of Verbs, Nouns and Constructions (英語の心理を表す構文：動詞・名詞・構文の意味的な相互作用)

論文内容の要旨

本論文は、英語の心理を表す構文（psychological constructions）に関して、構文文法（Construction Grammar）の枠組みに依拠し，これらの構文の意味特性を考察し、それぞれに生起する動詞と名詞と、その構文の意味的な関連性について明らかにしようとするものである。本論文で取り扱う心理を表す構文（＝(1)-(4)）は、[NP V NP PP]という共通した形式をとり、意味的には使役的な心理述語と類似する意味を表す。また、(1)、(2)、(3)については、 感情名詞が生起する。(4) においても感情名詞が生起するパターンを持つ。本論文では，これらの表現を「構文(construction)」 と捉え、生起する感情名詞の特性、共通性がみられる構文の意味との関連性を詳細に考察する。

(1) The man struck ***fear*** into his enemy.

(2) The manager instilled ***confidence*** into the team.

(3) The pop star sent his fans into a ***frenzy***.

(4) That voice sent shivers (of ***fear***) down her spine.

とりわけ、本論文は、Boas (2003)、 Iwata (2008)などで採用される語彙・構文的アプローチ(lexical-constructional approaches) の観点をとる。Goldberg (1995)にて提案された構文文法の基本的な構文の役割に加えて、動詞の意味や具体的なレベルでの構文の役割を大きく認める立場である。Croft (2003), Iwata (2008) では、verb-(class)-specific constructions といった特定の動詞や動詞クラスが組み込まれた具体的な構文のレベルが想定されている。本論文においても、このような下位レベルの構文スキーマを想定し、語と構文の意味的な適合性を考察する。さらに、verb-specific constructions だけではなく名詞も加味した構文、noun-specific constructions、 verb-noun constructionsを提案することで、心理を表す構文における動詞、感情名詞、構文との意味的な相互作用を捉えることができることを主張する。

本論文の構成は７章からなる。まず第１章で序説とし、研究の目的と本論文の全体的な構成を述べる。

第２章では、構文文法における「構文」の基本的な概念と語彙･構文的アプローチについて概観する。構文文法では、イディオム表現も含めて「構文(constructions)」として、形式と意味のペアリングであると捉えている。また、物理的な意味を表す構文からのメタファー的な拡張用法に関しても、メタファーの対応関係によって体系的な説明が可能となる。Goldberg (1995) では、構文間の関係を “inheritance link”として捉えられるが、一方、動詞など、個々の語の意味の詳細な分析に関しては不十分な点があることが指摘される。そこで、この問題を解消し、語彙の特性を詳細に分析する必要性と用法基盤の観点に重きをおく語彙・構文的アプローチ(lexical-constructional approaches)を本論文では採用することにする。このアプローチでは、構文スキーマを下位の具体的な表現により近いレベルで設定することで、動詞と構文との意味的な関連性に説明を与える。本論文における心理を表す構文についても、具体的な動詞の意味と構文との適合性は下位レベルの構文を想定することで，分析可能であると予測する。

第３章では、心理的変化を表す構文と意味的に類似する心理動詞に関する先行研究を概観し、その上で感情や心理を表す表現を認知意味論的な観点（感情のシナリオ、感情フレーム）から、心理に関わる意味要素を示す。まず、心理動詞のなかでも経験者が目的語におかれる心理動詞と本論文の対象構文の意味的な類似があるため概観する。この動詞類は、*depress* や *scare* のように状態性の違いから、振る舞いが変わる。つまり、心理を表す構文においても表す感情に幅があると予測できる。また、Hatori (1997) が概念構造で示すように心理を表す表現は、移動表現と平行的に捉えられ、心理的変化を表す構文についても心理動詞と同様の特性が示される。次に、認知意味論的な観点をとりいれ、感情をイベント構造のメタファーとして捉える。心理動詞の意味だけでなく、感情を表現するという意味構造が含まれることがわかる。この構造を感情フレームと当てはめると経験者と表現者という要素として示される。さらに心理的変化を表す構文に関わる要素として、時間の持続性(duration)、感情の開始 (onset of emotion)、強さ (intensity) を提示する。

第４章では、(1)の *strike fear into NP* 構文における動詞 *strike* の動詞の意味に注目して、*strike* の意味特性と関連する[V [FEAR]into NP] 構文の特性を考察する、それらの共通性をもつ動詞が[V [FEAR] into NP] という構文パターンに生起し、下位レベルの構文として捉えられることを論じる。この構文形式は、物理的な移動を表す使役移動構文のメタファー的な使用として捉えられる。まず、先行研究として、Boas (2003) での[blow NP XP] が中心的な動詞として、その意味的な類似性により、*sneeze* などの動詞の使用のバリエーションが拡張する構文事例を概観する。中心例である動詞と名詞を組み合わせた具体的な *strike fear into NP* 構文があり、*strike* の意味要素が共通する他の打撃動詞の使用が拡張されることを論じる。意味要素として、「突然性(SUDDENNESS)」、「強さ(INTENSITY)」、「連続性 (CONTINUITY) 」、「一回の働きかけ (ONE TIME) 」である。この要素は３章での提示した心理表現に関わる要素それらの部分的な共通性によって、*beat, slap, shoot* 等の打撃動詞の拡張的な使用がみられる。さらに、コーパスの事例を検索すると、[V [FEAR] into NP]に頻出であるのは、 *put* であり、そのなかでも慣用的な用法として *put the fear of God into NP* という形式をとるものがみられる。この形式では、 強意表現である目的語の *the fear of God* の一部を変えた小さな拡張の事例が観察され、動詞に注目すると、 *put* 以外の *strike* や *throw* が生起する [V [the fear of God] into NP] をとるパターンが確認できる。このように *put* は、*the fear of God* を目的語にとる場合、動詞の拡張的な事例のバリエーションがみられ、狭い範囲での拡張例がみられる。次に、*instill* は目的語に感情名詞をとる動詞であり、連続性という共通性で関連付けられ、感情の開始の様態は「段階的 (GRADUALNESS) 」という要素が取り出される。全体として、[V [FEAR] into NP]は動詞よりも、名詞が特定される noun-specific construction であることを提案する。このように、verb-specific constructions のほかにも、構文スキーマのレベルを想定するべきであると示唆する。また、具体的なレベルでは、*strike* と *fear* が結びつく構文が中心となって他の動詞の使用が拡張されることから、下位の verb-noun constructions として機能することを提案する。

第５章では、[V [Emotion Noun] into NP] (＝(1),(2)、構文Ⅰ) と[V NP into [Emotion Noun]] (=(3)、構文Ⅱ) という形式と意味の類似する2種類の構文パターンに生起する感情名詞と構文との適合性を分析し、それぞれの中心的な構文との継承を論じる。これらの２つの構文タイプは使役移動構文と使役移動構文の形式をとるため、先行研究で議論される構文の関係を概観する。構文文法においては、Goldberg (1995) では別個の構文として扱われ、メタファー拡張関係が論じられているが、Goldberg and Jackendoff (2004) では、総じて使役移動構文も結果構文も同じカテゴリーだとみなしている。また、語彙・構文的な分析の観点から、‘drive crazy’結果構文タイプの先行研究を概観する。この構文では動詞 *drive* が否定的な感情を表す結果句を特定する語彙が構文に直接組み入れられている。この観点を応用し、構文Ⅰと構文Ⅱについても感情名詞に着目して構文の特性を明らかにする。まず、構文Ⅰに生起する感情名詞は状態的で変化のある意味を示さない傾向が見られる。この特性から、使役移動構文の目的語の「移動物」の特性との類似を示す。さらに、構文Ⅰを下位レベルの構文とすると、生起する動詞は、感情名詞によって組み合わせが見られる。また、構文Ⅱに生起する感情名詞は感情カテゴリーに関わらず極度な感情を表す名詞である傾向がみられる。つまり、この名詞の意味的な特性から、結果構文において論じられる、結果句がある状態の最終的な状態を示すという意味制約 (有界性制約) との関係性が捉えられる。また、構文Ⅱは、生起する動詞の種類が、ある程度固定的である(*send, throw, drive*)。この２つの構文タイプの考察より、下位のレベルと抽象的なレベルの両方の特性を加味することにより、使役移動構文・結果構文との継承関係をみることができる。従って、本論文は、Goldberg and Jackendoff (2004)とは異なり、結果構文と使役移動構文はそれぞれ個別の構文として扱うべきであると示唆する。

第６章では、さらに、下位レベルの構文として(4)にみられる [send [shiver (of Emotion Noun)] PP]構文を考察し、*send, shiver* の役割と、構文と適合する感情のタイプについて考察する。この表現は、恐怖や興奮といったさまざまな感情タイプを表すが、*of* [Emotion Noun] 句を付加することで、表す感情を指定することができる。しかし、*calm* を指定することは難しく、*anger* のような名詞とも結びつきにくい。まず、*send* と *shiver* の意味によって指定される激しさ(感情の強さ)や突然(感情の開始)で素早く生じる感情を表すことが考察される。次に、Kövecses (1990) で提案された感情のシナリオのプロトタイプに当てはめると、*anger* は、使役移動構文形式では、感情の発生段階よりも、行動や表現を表す段階を表す傾向にあることを示す。さらに、[send [shiver (of Emotion Noun)] PP]構文は、verb-noun constructions のレベルで捉えられ、構文スキーマの *send* の verb-specific constructions のさらに下位レベルに位置づけられることがわかる。つまり、[send [shiver (of Emotion Noun)] PP]構文のような特異な性質を持つ構文であっても、適切なスキーマレベルを設定すると、動詞と名詞の意味的な関わりと構文スキーマとの関連により捉えられることができることを示唆する。

最後に、７章では結論を述べ、今後の課題についても触れる。本論文は、動詞だけでなく、名詞も加味した下位レベルの構文を提案することで、心理を表す構文における動詞、感情名詞、構文との意味的な相互作用を捉えることができることを主張する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 中尾　朋子 ）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	由本　陽子
	副 査	教授	木内　良行
	副 査	准教授	早瀬　尚子

論文審査の結果の要旨

中尾朋子氏の学位請求論文“English Psychological Constructions: Semantic Interplay of Verbs, Nouns and Constructions”は、[NP V NP PP]という形式に感情を表す名詞を用いることにより心理述語と類似する意味を表す以下の(1)-(3)のような構文を取り上げ、構文文法のアプローチによりどのようなVと感情を表す名詞の相互作用によって心理変化を表す意味が導かれるのかを明らかにしようとしたものである。

(1) The man struck fear into his enemy.

(2) The pop star sent his fans into frenzy.

(3) That voice sent shivers of fear down her spine.

まず、１章で研究の目的を明らかにしたうえで、２章ではGoldberg(1995)に始まる構文文法の基本的な考え方とその問題点を概観している。抽象的な上位の構文形式では下位に位置する個別の構文表現の容認性をとらえられないことを示し、その問題点を解消するモデルとして、Boas (2003), Iwata(2008)やCroft (2003, 2012)などが提案している、より具体的な下位の構文レベルを認める語彙・構文的アプローチが本論文の分析対象に有効なものであることを述べている。３章では、心理的変化を表す構文について感情のシナリオモデルなどの先行研究を概観し、本論文が扱う構文の意味を特徴づける要素として「時間の持続性(duration)」「感情の開始(onset of emotion)」「強さ(intensity)」を提示している。

４章から７章までが本論文の中核をなす、感情を表す具体的な構文の分析である。４章では(1)タイプの構文について特にVの意味に注目し、Vがstrike、Nがfearに特定されるVerb-Noun構文を認定した上で、これを中心とする下位構文カテゴリーが作られていることを主張する。そして、この構文形式が他の動詞（hit/ strike/put/instillなど）でも使われる理由として、それらの動詞がプロトタイプとしてのstrikeがもつ複数の特性と部分的に特性を共有していること、それに基づいて拡張されていることを主張する。また名詞の方も、fearを中心とするものに限定される一方で、(put) the fear of God というヴァリエーションを許すようになっており、この点を名詞の観点から見ればNoun-specific構文という位置づけがなされると主張する。

５章では(1)と(2)を比較し、まず前者を移動のプロセスに焦点を当てる使役移動構文、後者を結果状態に焦点を当てる結果構文からの比喩的拡張と見なせることが主張される。また前者では状態的な感情が、後者では極端な程度を表す構文が、それぞれ使われる傾向が見られたが、この違いはまさに、使役移動構文に基づいているか結果構文に基づいているかの違いとしてとらえられると述べている。またこの結果は、先行研究（Goldberg and Jackendoff (2004)）が展開している、「使役移動構文を結果構文の一種と見なし、二つの構文を統一的に扱う」とする議論に対して疑義を提出するものであり、ここでの研究考察から二つは先行研究の主張とは逆に、別個の独立した構文として認定すべきだとする主張もなされている。

６章では(3)タイプの構文をとりあげ、Ｖとshiversに後続して現れ得る感情名詞の条件について詳細に調査し、この構文がV をsendに特定した構文のさらに下位レベルに位置づけられるVerb-Noun構文であることが主張されている。またある種の感情動詞がこの構文に合致しない理由を、Kövecses (1990)による感情のシナリオモデルで説明づけようとしている。７章には結論として今後の展望が述べられている。

結果構文や使役移動構文など、構文文法で頻繁に取り上げられている表現のなかでも、本論が扱っているのは感情を表すタイプという、従来の構文の例からはやや逸脱した特性を見せる表現である。このニッチな領域に焦点を絞り、

そこから使用条件と意味の広がりについて丹念に検討した結果、それまであまり光を当てられていなかった言語データを掘り起こすことにつながっており、独創性が見られる。また、動詞を特定したVerb-specific構文という考え方は、構文論の先行研究でもすでに提案されている概念であるが、それとは別の、名詞を中心として特定化したNoun-specific構文や動詞と名詞の組み合わせが特定化されたVerb-Noun構文というレベルをも構文として認定することを提案した点も、この論文が扱うテーマから出てきたオリジナリティだと考えて良い。その妥当性については今後詳細な議論の余地があるものの、新しい観点を言語研究、構文研究の分野に導入する礎を築いたという点で、評価できる。

ただし、そのアイディアの先駆性ゆえか、個々の具体的な分析に関しての問題点は残っている。なぜある特定の動詞のみが(1)-(3)のような構文に拡張的に使用されうるのかを、本論文ではプロトタイプ的な動詞と意味特性を複数共有するからということで説明しようとしている。しかし実際の分析の中で提案されている特性が、本当に動詞単独に帰される語彙内在的意味特性なのか、その動詞が具体的な文形式で使用された時に生じる構文形としての使用特性なのか、についての区別が曖昧になっているという指摘や、相矛盾する特性を一つの構文形式の意味としてどのように取り込むのか、という問題が指摘された。また、より理論的な問題としては、提案されている構文のすべてに対して、本当に意味と形式とが特異な形で結びついた「構文」という位置づけを与えられるものなのか、単に動詞の意味の差によって説明できる、もっと上位の構文の一例なのではないか、という可能性の指摘や、また構文からの拡張例と、拡張例が別の構文と見なされる場合との区別をどのようにつけるのか、という問題提起もなされた。

このように、具体的な構文の認定と、その構文間の関連性をどう体系化し、精緻化していくかについては未解決な問題が少なからず残っていることは否めない。しかし、VのみならずNも特定された下位レベルの構文をネットワークの中で積極的に認めていこうとする本論の主張は、先述のとおり、構文文法理論に新たな一石を投じるものであり、コーパスを用いた調査と個々の具体例の丁寧な意味分析によって、ある程度説得力のある根拠が示されていることから、語彙・構文的アプローチを支持する分析として理論的貢献が認められる。以上により、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値あるものと認めた。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添える。